

# 知識探訪

## 多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

### マラッカの病室から広がる世界

柏美紀 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士後期課程)

2020 年 1 月、春節(旧正月)でにぎわうマラッカ州に到着した。私の目当てはインド系プラナカンのヒンズー寺院の祭礼。滞在先の女性とドラゴンダンスの話に夢中になり、気付けば祭礼の始まる時刻ギリギリに。急いで向かい、ついに寺院が見えた時。悪路で転び、鋭い痛みが足を伝った。

祭礼は気になるが、足が言うことをきかない。やむを得ず配車サービス「Grab」を手配し、保険会社に案内されたマラッカ州の中核病院へと移動することにした。

海外で病院を訪れるのは初めてだった。エクス線、磁気共鳴画像装置(MRI)、コンピューター断層撮影装置(CT)の検査が続き、骨折と診断され、急きょ入院生活が始まった。着替えやスマートフォンの充電器もなかった。数日間続く祭礼が気になり、いつ退院できるのかと看護師を見つけては尋ねたが、らちが明かない。諦めて、病院の観察を始めることにした。



マレー料理の病院食 (筆者撮影)

病院食は、マレー料理、中華料理、西洋料理、菜食料理から選ぶことができた。その食器と入院する部屋は、イスラム教徒(ムスリム)用か否かで分けられていた。日本人の私は、非イスラム教徒用の 6 人部屋に割り当てられた。

見舞客も多く、部屋は多くの人であふれ、にぎわっていた。唯一身寄りのない私は皆の関心の的となり、質問攻めにあった。自己紹介と入院経緯の説明を一通り終わると、逆に私はそれぞれの人に質問を始めた。入院患者はジョホール州ジョホールバルから来た華人や、メダンなどのインドネシア出身の華人の仏教徒だった。

彼らにとって最も質の良い医療を受けられる場所としてはシンガポールがまず思い浮かぶが、マラッカ州ではそれよりも安価で、それぞれの地元よりも質の良い医療を受けられるから来たという。

私のフィールドノートは、ベッドから一步も動かずとも、各地の未知の情報で埋まり始めた。その他にも、見舞客としてメダン出身のパタック人のキリスト教徒の女性が部屋を頻りに訪れ、地元の言語や文化について詳しく教えてくれた。

夜になると、ベッドがカーテンで仕切られた。ふと体の力が抜け、頬を伝う涙で枕が湿った。

病院で迎える初めての朝。マレー系のスタッフが、私の血圧を測りながら、明日の食事はそれぞれのジャンルが良いか尋ねてくれた。枕元の入院患者の名前を書く欄には、インド系の看護学生が、「早く良くなってね」というメッセージを書いてくれた。ルームメイトやその見舞客は、旧正月のお年玉と充電器を下さった。

リハビリテーションのマレー系のスタッフは、初めての松葉づえに苦戦する私が笑顔になるよう、冗談も交えながら明るく寄り添ってくれた。その支えによってようやくたどり着くことができたベッドから数十メートル先の窓からは、大きなヤシの木が見えた。

結局、新型コロナウイルスの影響を受け、調査地に行けないまま、早期帰国することになった。関係者の皆さまには大変ご迷惑をおかけしてしまったが、多くの方々を支えられて、数年後、またマラッカ州に帰ることができた。あの病院にも、熱中症で舞い戻ることになった。築約 20 年の病棟はきれいに改装され、スタッフの多くも入れ替わっているようだった。

今は両足で歩くことのできるありがたみをひしひしと感じつつも、今度は手の甲に刺された点滴の痛みにも必死に耐えていた。ふと窓のほうに目を向けると、大きなヤシの木が見えた。

#### < 筆者紹介 >

1997 年、群馬県生まれ。東京外国語大学国際社会学部(マレーシア語専攻)卒業。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻博士後期課程在籍。専門はマレーシア地域研究。インド系ヒンズー教のプラナカンについてマラッカ州を中心にフィールドワークを行っている。